

ぜんまい

令和7年 1月
第75号



奥日光 日光支所の養魚場でふ化した稚魚

CONTENTS

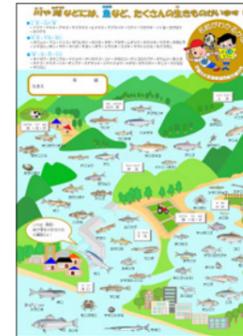
新年のごあいさつ	2	「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方」提言について	22
全内漁連開催の各会議について		内水面漁協(第45回)	24
監事会、総務委員会及び理事会を開催	3	愛しきアユ(第48回)	25
カワウ対策の現地検討会を開催	3	内水面養殖事業者向け補償制度のご案内	26
みんなでやるぞ内水面事業の総合評価検討委員会・現地調査を実施	4	全国豊かな海づくり大会～おんせん県おおいた大会～	27
「内水面漁協の運営に関するアンケート調査」の概要報告	6	水産多面的機能発揮対策支援事業	27
第65回全国内水面漁業振興大会を開催	10	令和6年度アユ種苗の河川放流実績調査報告	28
第2回全国事務担当者研修会を静岡県で開催	14	日光支所から	29
ワカサギに学ぶ会	16	業務日誌	30
第55回養鱒振興全国大会	18	新会長の紹介	31
全国鮎養殖漁業振興懇話会	18	全内漁連の事務体制について	31
秋の叙勲・水産功績者表彰	20	新聞記事から	31
内水面はポテンシャルの宝箱	21	編集後記	31

全国内水面漁業協同組合連合会

漁業者(会員漁連の傘下漁協組合員)年間契約「四回発行」定価三〇〇〇円本体(一七八円送料サービス) 単品定価七五〇円本体(六八二円送料別)
漁業者以外の購読者 年間契約「四回発行」定価三二〇〇円本体(一九〇円送料サービス) 単品定価八〇〇円本体(七二八円送料別)

information

全内では、クリアファイル・パンフレット・ポスターの普及啓発用資料を作っています。申込は各漁連でのとりまとめをお願いしています。申込締め切り後に新たに発注する場合には、単価が高額になりますので、初回申込でまとめて注文くださるようお願いいたします。詳しくはお問い合わせ下さい。



クリアファイル表図案 (A4) クリアファイル裏面図案



パンフレット図案 (三つ折り6面)



ポスター図案 (B3判)

機関誌 **ぜんまい** 第75号

全国内水面漁業協同組合連合会機関誌
令和7年1月発行

発行人：全国内水面漁業協同組合連合会
代表理事会長 谷 公一

編集：本所 機関誌編集委員会

発行所：全国内水面漁業協同組合連合会
〒101-0044

東京都千代田区鍛冶町1丁目10番4号 丸石ビル4階

TEL：03-6260-9595 FAX：03-5296-2030

ホームページ：https://www.naisuimen.or.jp

印刷：鶴川印刷株式会社

〒923-0053 石川県小松市河田町丁33番地

新年のごあいさつ

全国内水面漁業協同組合連合会 代表理事会長 谷 公一



あけましておめでとうございます。

全国の内水面漁連・漁協並びに関係機関の皆様には、日頃より内水面漁業の振興のために、豊かな河川環境の保全、水産資源の増殖活動等にご尽力いただいておりますことに心から敬意を表します。

昨年は、1月1日の元旦に能登半島地震が発生し、加えて復旧に立ち上がりかけた9月に能登半島を豪雨が襲い、多くの河川や内水面漁業関係者が甚大な被害を受けました。被災された地域、漁協や組合員の皆様には心よりお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧・復興が成されますようお祈り申し上げます。

▼解散・総選挙と全国大会▲

私事ではありますが、昨年10月の衆議院解散に伴う総選挙では、逆風と言われている中当選を果たすことができました。政治とカネをめぐる自民党への厳しい批判の中、ご支援をいただいたことに心より感謝を申し上げます。少数与党となりましたが、私は今後とも、「驕らず、怯まず、へこたれず」の信念を胸に、地に足を付けて、地域の皆さんの代弁者として全力を尽くしてまいります。

また、昨年11月には、宮城県仙台市において第65

回全国内水面漁業振興大会を開催し、全国から約400名の内水面漁業関係者やご来賓の皆様にご参加をいただきました。私は国会のため懇親交流会からの出席となりましたが、皆様には改めて御礼を申し上げます。

特に今大会は、13年前の東日本大震災の被災地宮城県での開催であり、本年全国大会が能登半島地震被災地の石川県において開催予定であることから、三陸から能登への復興のエールを伝える意義深い大会となりました。大会で採択された現場からの諸提案については、これから関係省庁と意見交換を行うって課題を掘り下げ、早期の解決を図ってまいります。

▼環境にやさしく災害に強い川づくり▲

近年、地球規模の気候変動等に伴い、台風や豪雨災害が頻発化・激甚化しています。このため、全国各地で災害復旧や防災・減災のための河川工事が行われ、長期の濁水、河川の平坦化・直線化など河川環境が悪化し、多くの内水面漁協が被害を受けています。治水や防災は私のライフワークですが、それらを環境と両立させなければならぬと考えています。河川法に基づき「多自然川づくり」は全ての川づくりの

基本とされており、現在、国が進めている「流域治水プロジェクト」においても、治水と環境の両立を図るよう、生物の多様な生息環境の保全・創出など環境の取り組みを推進することとしています。そのためには、内水面漁協を含む地域の幅広い関係者と河川管理者等が連携して、人と環境にやさしく災害に強い川づくりを進めていく必要があります。

川は単に水を流すだけの水路ではありません。人々に憩いや安らぎを与え、豊かな水産資源を育む川や湖は、かけがえのない地域の財産です。それを守り、育て、活用している内水面漁協は、地域づくりに欠かせない存在です。内水面漁協におかれては、地域づくりの重要な役割を担う主体として、河川管理者や市町村など地域の幅広い関係者と連携・協働しながら、地域ぐるみの活動を展開していただきたいと思っております。

内水面漁業を取り巻く状況は環境面だけでなく、様々な面で引き続き厳しい状況が続きますが、本会は、内水面漁業の現場の声を聴き、課題や要望の解決に向けて引き続き尽力してまいります。新しい年が、内水面漁業関係者の皆様にとって良一年でありますよう祈念いたしまして、私からの年頭のご挨拶とさせていただきます。

全内漁連開催の各会議について

監事会、総務委員会及び理事会を開催

○第2回監事会

令和6年11月29日、千代田区丸石ビルの全内事務所において、齋川隆夫代表監事（青森県）、米村義信監事（山口県）、峰野修監事（愛知県）の3名が出席し、令和6年度上半期の監事監査を行いました。

○第5回理事会

11月14日、宮城県仙台市の江陽グラウンドホテルにおいて、第65回全国内水面漁業振興大会の進行については石川県金沢市で開催することが承認されました。

○第3回総務委員会・第6回理事会

12月16日、千代田区の衆議院第二議員会館で左記のとおり開催しました。

第3回総務委員会

第6回理事会に先立ち、理事会の議案進行の確認、第13回全国内水面漁業振興功績に係る顕彰について、職員の退職及び採用について、令和7年度の

通常総会の会場と日程について協議を行いました。

第6回理事会

(1) 本会の運営状況及び中間監査結果について
令和6年度上半期の運営状況について事務局より説明、齋川隆夫代表監事より監査報告をいただき、承認されました。
(2) 令和7年度賦課金の徴収方法について
令和6年度と同様の方法で徴収する案が承認されました。

(3) 川の日を祝日とするための対策について
「海の日」や「山の日」の制定経緯を説明。引き続き制定に向けて、内水面漁業振興議員連盟など各所に働きかけを続けることとしました。
(4) その他

・第8回全国シジミ・シンポジウム in 松江の後援について
後援を了承することとしました。
・今後の全国内水面漁業振興大会の開催順序について
地方での開催は2年に1回とし、東

京の開催と交互に行う方向で進める事としました。

- ・職員の賞与支給について(報告)
- ・今後の業務体制について(報告)
- ・今後の主な予定について(報告)

カワウ対策の現地検討会を開催

効果的な内水面水産資源被害防止技術開発事業(カワウ)委託事業)

●現地検討会

11月25日、群馬県みどり市のみどり市多世代交流館において、標記事業の現地検討会を開催しました。事業の実施状況について報告があり、高津戸ダムへ移動し視察を行いました。

事業実施状況の概要は以下のとおりです。
水研坪井氏…これまでの実績をベースに現在はGPSロガー装着について各地で活動しているところ。また県の体制がうまくいっているところの仕組みを解明していく。

栃木県水試村井氏…鬼怒川周辺の6箇所のコロニーについて繁殖抑制試験を実施しているところ。県内の漁協にテグス張りの聞き取り調査を行い、結果を取り纏める。

(株)ういるこ山本氏…レーザについては、試験池での結果だとあまり効果

がないようである。GPSロガーによる行動追跡については夜だけ発信する設定にしてみたがダム湖では電波が届かないことがあり記録が途絶えてしまう。

他2社より…モンスターウルフの鳥版でモンスターイーグルを開発した。水上ドローンに乗せての活用ができないかと想定している(想定価格はイーグル約70万円、ドローン約350万円)。超音波ネズミ撃退機「まもる君2」はツキノワグマで効果があつたことからカワウやサギ類での効果を検証している(価格は約20万円で電源が必要)。

(株)フィッシュパス渡辺氏…カワウモニタリングシステムについて、全内のこれまでの報告様式をベースにアップグレード中。全内から提供のデータを入力してみた。普及も進めている。

栃木県鬼怒川漁協(栃木)郷間氏…銃器による対策は猟友会の支部長との関係が大切。4〜7月で約620羽捕獲。テグス張りは14支部で行っている。多いところでは2kmで300本張っている。11〜2月は猟期として銃器捕獲を実施中。

秋川漁協(東京)安永氏…漁協のメンバーが同じユニフォームを着てカワウ対策をすることで忌避効果が出ている。125枚作った。自治体と警察と漁協が連携し、テグス張りでのトラブルにも

内水面漁協

第四十五回

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産技術研究所
環境・応用部門 沿岸生態システム部 内水面グループ 主任研究員

中村 智幸



組合員の高齢化

「内水面漁協の組合員が高齢化している」という話をよく聞きます。しかし、そのことをきちんと数値で示したものは私が見たことがありません。

探したところ、それに近いものとして、この機関誌の第59号に玉置泰司さん（私が勤務している研究所の先輩）のデータがありました。玉置さんは2016（平成28）年と2017（平成29）年に全国の内水面漁協を対象にアンケート調査を行い、2015（平成27）年の334漁協の正組合員119,337名の10歳ごとの人数と割合を表に示しました。それをグラフにしたのが下の図の上のほうの図です。これを見ると、正組合員は60代で最も多く（全体の34・8%）、次いで70代で多いこと（27・0%）、そして10代、20代、30代では5%未満であることがわかります。下のほうの図は私が総務省の国勢調査のデータから求めた玉置さんの調査結果と同じ年（2015年）の国民全体の年齢構成です。その図と上のほうの図

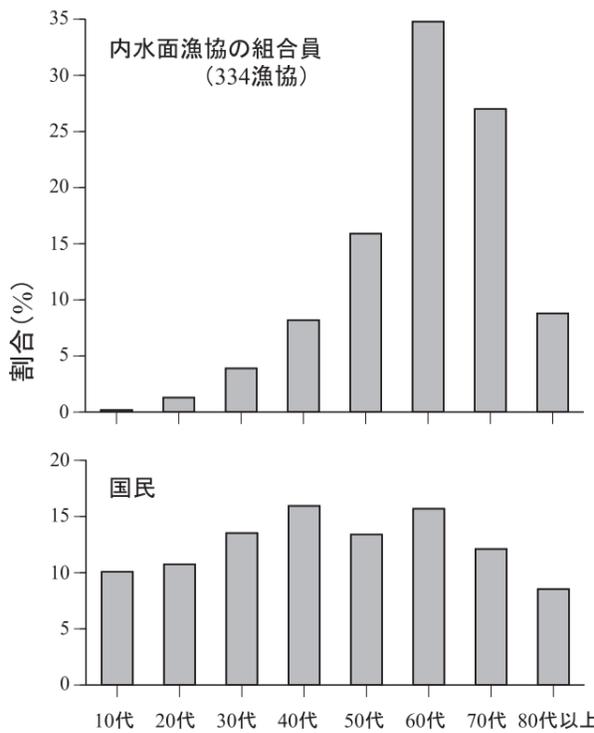
を見ると、国民全体にくらべて内水面漁協の正組合員のほうが60代と70代の人が多いのが一目瞭然です。

「高齢化」というのは「高齢者の割合が増加している」ということです。今回の結果は「2015年についてみると、国民よりも内水面漁協の正組合員のほうが高齢者の割合が多い」ということを示しているのであって、「高齢者の割合が増加している」とことは示していません。しかし、今回と同じようなデータが毎年か数年おきになれば「高齢化」していることを言えますし、残念ながらそのようなデータはありませんが、実際に高齢化は進んでいるでしょう。

「若者が組合員になったが、結構早くやめてしまった」という話をよく聞きます。やめた理由としてよく耳にするのは、漁協のいろいろなことを高齢の役員（組合長や理事、総代、各種委員など）や高齢の組合員によって決められて、自分たち（若者）の話を聞いてもらえなかったり自分たちが決定に関わることが

できなかつたりしたということです。漁協は若い組合員の話に耳を傾けたり、若い組合員を役員などに登用したりして、若者が漁協の意志決定に関われるようにするのが良いと考えられます。そうすることによって、若者の漁協加入や

その後の在籍を促進することができます。特に釣りに遊漁に関しては、若者のほうが最近の流行に敏感で、釣り人（遊漁者）が何を求めているのかを知っています。以前にこの連載でお話ししたように、多くの内水面漁協で収入の多くの部分を遊漁料が占めています。若い組合員の考えをもとに釣り人が多く来る釣り場を作れば、遊漁料収入が増えて、漁協の収入も増えます。また、この連載でお話ししたように、国民の多くが漁協に魚や河川湖沼を取り巻く自然環境の保護を期待しています。そのような活動に取り組み場合も、若者の意見は貴重です。



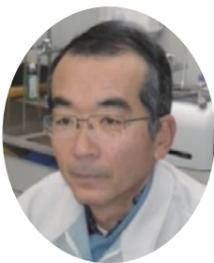
内水面漁協の正組合員（上）と国民（下）の年齢構成（2015年）

愛しきアユ

第四十八回

庄川沿岸漁業協同組合連合会 常務理事
富山県内水面漁業協同組合連合会 副会長
京都大学 非常勤講師

田子 泰彦



「土用隠れ」はE・イクタルリ菌の仕業だった!?

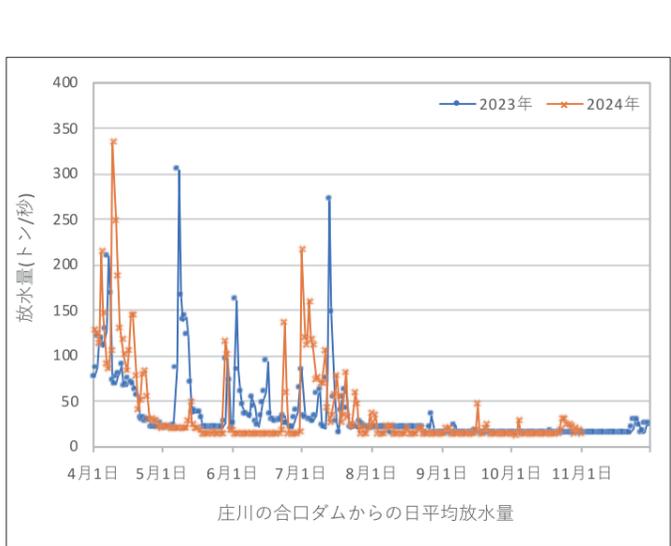
今までは、E・イクタルリ菌等について、私の経験則でお話してきましたが、今回は、（公社）日本水産資源保護協会が平成31年3月に出版した「河川におけるアユのエドワジエラ・イクタルリ感染症」（以下、同書）を参考に論考を進めたいと思います。同書は、アユの病気に詳しくない私にも、とても分かりやすい良い冊子です。

同書には、E・イクタルリ菌は川底の石の付着藻類や泥に付いている常在菌で、アユは藻類の摂取によって感染するとはっきりと書かれています。これは極めて重要な事実です。この事実により、その河川にE・イクタルリ菌が常在しなければ、どんなに他県等から釣り人が入って来ても、そのことでアユにはE・イクタルリ菌はうつらないことが言えます。また、数キロレベルの範囲で、突如として、アユが釣れなくなる現象についても説明が付きまします。高水温等で付着藻類のE・イクタルリ菌が増えれば、その付近にいるアユはみんなE・イクタルリ菌感染症に罹ってしまいます。ただ、アユ体内でのE・イクタルリ菌の増殖量やアユ個体の免疫力の違いで、個体ごとの症状は異なってくるのは当然かと思えます。それで周辺のアユ全体としては、闘争心を無くして、追いつかないアユが多くなり、釣れにくくなるのだと考えられます。

昨年は一昨年に続く猛暑の連続で、庄川の河川水温は8月には25℃を超え、E・イクタルリ菌感染症の発症が心配されました。しかし、9月になっても、庄川や神通川など、富山の川では、一昨年のように死亡魚が流れてくるというような顕著な影響（被害）は生じませんでした。これは、一昨年よりも若干水温が低いうえ、昨年は、高水温になる前の7月に出水が続いたこと、また、8月以降もダムからの放水量に表れない局地的な豪雨があつて、石に付着した藻類の多くが流されて、E・イクタルリ菌量が減少したためだと考えています（図）。

また、アユには「土用隠れ」があることが知られていて、土用の丑（7月下旬〜8月上旬）の頃になると、アユが釣れなくなる、獲れなくなると言われています。2020年には長良川ではスーパー土用隠れが起こったという報告もあります。通常の土用隠れでは、アユは高水温を避けて淵に隠れるのですが、長良川では最近では淵がなくなってきたので、より水温の低い上流域にまで行ってしまったとのことですが、的を射た、面白い説明だと思います。それでも、それだけの理由なら、その淵や上流域ではよく釣れるはずですが、土用隠れに含まれる、釣れなくなる、獲れなくなるという説明にはなりません。

庄川でも昨年は海産アユの遡上量は多かったのだ



すが、昨年8月には水温が25℃を超え、アユの数は多く見えるのに釣れないという状況に陥りました。投網やテンカラ網でも、縄張りを持たず、群れアユ化した個体は獲れにくいものです。これらも、E・イクタルリ菌のせいでも、土用隠れ的な状態になってしまつたと考えればうまく説明ができます。私はE・イクタルリ菌の存在が平成19年に報告されてから、「土用隠れ」にはE・イクタルリ菌が絡んでいるのではないかと思つてようになりました。高水温で付着藻類のE・イクタルリ菌が増え、それをアユが摂取して体内で増殖し、一定量以上になれば、闘争心を失つて群れアユ化して、釣れにくくなるのではと考えています。こういう理由で、私は「土用隠れ」は河川の常在菌であるE・イクタルリ菌も関与しているのではないかと密かに思っています。